

別れ

人生において"別れ"は何度もやってくる。
卒業や引っ越し、そして死別。でも、悲しいだけじゃないのかも。

MATRON

新設!瑞星寮

余市に新しい女子寮が
完成しました。 P3



EVENT

わたしたちの北星余市展

静岡県の大学生が
北星余市の写真展を開催! P4



BOOK

別れと旅立ち

春になると、おおはくちょうは生まれ故郷の北国へ旅立っていきます。後ろ髪引かれるような思いを残したまま旅立つことだってあります。それでも旅立たなければならない。そういうタイミングってあるんです。旅立つ日が迫ってくる、それに合わせて、心も身体も準備を進める。どんな準備をするのかは人によって違うでしょう。ともかく「旅立つ」ってことに向けて全力を尽くすって方法もありますし、辿り着く北国までの安全やルー

トを調べて、到着先での生活のための備えまでしないと安心できないって人もいます。まあ、人生でそのような機会は数回やってきます。繰り返すうちにだんだん慣れて要領がよくなっていくので心配することはありません。むしろ、大切なことは「旅立ち」とセットになってついでに「別れ」とどう向き合うかです。会う機会があるだろうと、「じゃあまたね～」なんて言いながら、会えなくなってしまった友人が増えてきました。再会できたら奇跡。そのつもりで、そのときに伝えられる精一杯の別れを告げましょう。



おおはくちょうのぞら
手島圭三郎・作・絵 / 絵本塾出版
¥1,836



LETTER

よくがんばったよなあ、じぶん

僕たちって、頑張ってるつもりじゃなくても、案外頑張っちゃってる気がします。頑張ってない人なんていない

ってんだ」と、どこか救われるような印象を受けるから不思議。

山岳救助ボランティアの島崎三歩。山をこよなく愛する山男です。ほぼ山に住んでる感じの格好い男です。映画にもなりました。彼の遭難者へかける「よくがんばった」という労いの言葉。「頑張る」というとどこか力が入った感じがするんですが、彼に言われると「そうか、僕って頑張

三歩は、山に登るなかで大切な仲間たちと悲しい「別れ」を経験してきました。どうやら、そういう別れの経験が、彼をより強く、そしてしなやかに生きることを教えてくれたようです。別れは人生にとって、かけがえのないものなのです。



岳
石塚真一 / 小学館 / ¥566

BOOK

そういうふうにはなりたい

「こんな風になりたいな」という憧れや願いはありますか？ 僕あまりそういう思いを持っていなかったんです。でも、できるだけ早いうちに見つけておくといいですよ。その方が、そうなれる可能性が高くなりますから。今は、憧れから遠いところにいるかもしれませんが。そういうこともあります。ただね、静かに願ひ続けているだけでも、何もしていないのとは全然違います。急にチャンスがやってくるかもしれないでしょ。その

ときに、心構えができていないと、一番欲しいものを取り逃がしてしまいますから。



雨ニモマケズ Rain Won't
宮沢賢治・文 / アーサー・ピナード・英訳 / 山村浩二・絵 / 今人舎
¥1,620

BOOK

ことばを、みつける

この本に書かれている文字はひらがなだけ。でも、読み始めるとどんどんと頭の中にイメージが広がってくるから、詩の世界は不思議。なんだかよくわからないけど、モ

ヤモヤする気持ち。そんなモヤモヤに言葉をつけてあげよう。すると、自分の気持ちや状態がわかってきます。僕たちは、言葉にしないと考へたり気がついたりできないんだ。3月に感じる気持ちってさ、「寂しさ」「不安」「焦り」「緊張」とかかな？ 言葉にするとその気持ちと向き合えます。そして、乗り越えられますよ。

みみをすます
谷川俊太郎・著 / 福音館書店
¥1,728



LIFESTYLE

卒業するのって、寂しいことばかりじゃないかも。

文 國久麻美



何回もこの星しんぶんを書いてるように、私は2007年に北星余市を卒業しています。自分の卒業時の心境を思い返してみると、友達や、通い慣れた学校を離れるという寂しさは全くなく、卒業後の人生が楽しみで、早く卒業したい！友達だって会おうと思ったら会えるし、学校だってまた遊びに来ればいいやぐらいの気持ちでした。でも、だからといって卒業自体をどうでもいいやと思っていたわけではなく、北星余市を卒業したことは、私の中で今でも自信と誇りに繋がっています。

「たかが3年間高校生活を送っただけじゃないか」と思われるかもしれませんが、北星余市に来る生徒の状況は本当に様々です。ここに辿り着くまでのみんなが抱えて来た様々な思い、自分や周りと同じ向き合ってきた時間、その中で生まれる感情や葛藤、もちろん学校生活の中で周りの人と関わることで学んだこと、その今までの全てを含んだ3年間なので、単純に高校3年間という期間を修了したものを示す為の「卒業」ではなく、とても大きな「なにか」を得られる「卒業」なのです。

では、その「なにか」とは何か？それは人それぞれ違うと思いますが、卒業するみなさんはその「なにか」を得ることが出来たでしょうか？ちょっと考えてみてほしいと思います。大学や社会に出たら、今以上に多くの人、大人に出会います。そこにはもちろん自分の考えや価値観と違う人もいます。勉強も大変な時があると思います。理不尽なこともいっぱいあります。北星余市で3年間過ごしていた方が良かった、楽しかったと感じる時もあると思います。でも、そんな時にこそ北星余市で卒業した

ことの意味を思い出してほしいと思います。私自身、卒業後にたくさん失敗や挫折をしました。でも、そんな時に励みになったのは「北星余市を卒業した」ということでした。あの時、3年間余市で頑張ることが出来たという自信。その時に感じたことや考え、自分が大切にしたいと思ったこと、自分の声に耳を傾け何とか今こうして



過ごすることが出来ています。卒業したからといっていきなりスーパーマンの様に何でも出来る様になれるわけではありません。でも、誰もがその力は持っていると思います。なぜなら、みなさんは北星余市を卒業して「なにか」を得たからです。卒業するって寂しいことばかりではない気がします。



國久麻美 | Asami Kunihisa

2007年に本校を卒業し、2015年から職員室事務として勤務。地元は東京だが、たまに帰省すると人の多さに疲れ、すぐに余市に帰りたくなる。バスケットが好きで生徒に混じって一緒にやることも。最近ラーメンと入浴剤にハマりだしている。

LIFESTYLE

別れるということは、出逢うということ。

文 西岡知洋

人が生きていく上で、「出逢い」は欠かすことが出来ない。同時に「別れ」も避けることが出来ない。「出逢い」と「別れ」は表裏一体であり、極端な話をすると人が誰かと出逢うとき、すでに「別れ」は始まっていると言える。

人のいのちの営みの中で「別れ」は出来れば避けて通りたい大きな痛みや喪失の経験である。予期せぬ突然の「別れ」(死別など)も、予定されている「別れ」(卒業や引っ越し)も同じように痛みや寂しさ、時に言葉に出来ない憤りや呻きを生む。全てのいのちには必ず終わりがあるという事実の前に、私たちは虚しさや、孤独を覚えざるを得ない。

北星余市高校はキリスト教主義学校で、「聖書」を学んだり、礼拝を行っている。私はこの「聖書」の中に、先の孤独や虚しさに向き合う力が秘められているように思う。全てのいのちを創造した神は、その最初の人間を見て「人が独りでいるのはよくない」と述べたとされる。それ故に聖書における人間観は「共に生きることを促されているいのち」であると言えると思う。「あなたは独りじゃない」と。また、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」と植物のいのちの営みが語られる。つまり、枯れてしまうことは、たしかにそのいのちの終わりに見えるが、しかしその「終わり」が新しいいのちの始まりだ、と。そしてこんなに小さな種子の中に、それほどの希望が秘められているなら、私たち人間はどうだろうか？と問いかける。「終わり」や「別れ」は決して悲しみや孤独にはとどまらないこと。新しい「始まり」や「出逢い」という希望があるという、向き合い方の変化を届けてくれているように思う。

私が北星余市に在学中、友人が学校を去っていった。卒業まであとひと月ほどのころだった。それはあまりに突然で、大きな痛みをもたらした。来月、私たちの学年の同窓会が開かれるという。別れざるを得なかった友人も出席するらしい。突然の別れは、別れのままでは終わらなかった。再会の時に、新しく出逢い直すその時に、どのような言葉を紡ごうか。その時を心から楽しみにしている。



西岡知洋 | Tomohiro Nishioka

1986年高知生まれ。小樽で育ち北星余市で高校時代を過ごし、京都の同志社大神学部で学んで2011年より日本キリスト教団牧師。愛知県と静岡県の教会を経て、2018年4月より余市教会に牧師として舞い戻ってきました。出会いと別れを繰り返して余市との再会です。



LIFESTYLE

「別れ」のだいぶあと。

文 佐藤有司

「別れ」というとやはり去年の卒業を思い出す。余市には北星余市に通った期間を含めれば4年ほど暮らした。今でも、自分の人間関係の土台はすべて余市で作られたものだと言える。だから卒業に対する思いは人一倍強かったと思う。それでも卒業式ではうまく泣け

なかった。その時はなぜなのかわからなかった。時は流れ、去年の11月、母方の親戚が亡くなった。余市、そして北星に行くまでの準備期間に大変お世話になった方だった。しかし地元に戻るのには苦痛だった。地元に対しての複雑な感情、解決できない状況にまだ整理

はついていなかった。実家を出てから5年間、一度も帰ったことはなかった。気づくとLINEでいろんな相手に弱音を漏らしていた。そんなことをするのはほぼ初めてだった。それでも一度は帰らなければならない。東京から列車を乗り継いでいった。地元に近いうちに、懐かしさとともに心身にゆっくりと重力がかかっていくような感覚に襲われ、最寄りの駅に着いたときにはすっかり疲弊していた。

どうになってしまうのかという気持ちのまま、ホテルの部屋で慣れないスーツに着替えていた時、LINEのコールがあった。北星余市の同級生と一緒に生徒会をやった仲間だった。「LINEの内容を心配して」と彼は言い最近の近況など10分ほどたわいもない話をしたただけだったが、それで自分はとても救われたのだった。そして彼だけではなかった。卒業で「別れ」た友人たちから次々届くメッセージ



は自分が無事に東京へ帰るまでの力をくれた。

どこかで、奇跡のようだった北星の生活も、関係性も「別れ」で消え失せていく、ならもう過去のことにしてしようと思いはじめた自分はあの卒業式で泣けなかった。



間違っていた。北星の3年間はこうやって今の時間にしっかりとつながり、悲鳴をあげた自分に答え、支えてくれる。それを自分は「別れ」のだいぶあとに、心から実感できたのだった。そして東京に帰ってから、やっと泣くことができた。卒業式の前まで。

佐藤有司 | Yushi Sato

青森県出身、小学校から約15年間の引きこもり生活のあと2015年、26歳で北星余市市に入学、2018年卒業。現在は和光大学に在学中。最近早すぎるぎっくり腰に襲われた30歳。





MATRON

北星余市高校出身の管理人

2018年、新しい女子寮が誕生しました!

瑞星寮 管理人・佐々木達也さん

北星余市高校では、全国からの生徒の受け入れを積極的に行っているため、高校の周りにはたくさんの寮・下宿が点在しています。そして、余市町黒川町に新たに女子寮「瑞星寮」が誕生し、2018年4月から受け入れを開始しました。

管理人は北星余市高校卒業生の佐々木達也さん。以前から発達障害や不登校のこども達の力になれないかと考えていた佐々木さんは、寮・下宿が足りないと感じ、女子寮の開設に踏み切りました。寮には奥さんと2歳のお子さんも一緒に暮ら

しており、他の寮とは少し違う雰囲気。「北星余市高校は自由な時間がたくさんあるので、課外活動や部活動、アルバイトなど、その子がやりたいことを全力でサポートしたいと考えています」と佐々木さん。管理人としてはもちろん、北星余市高校出身の先輩として色々なアドバイスをもらえそう。見学はいつでも受け付けています。

見学・入寮のお問い合わせ

北星余市高等学校 0135-23-2165(担当國久)

とおるちゃんに きいてみよう



Q 卒業して友達と離れることが本当に辛いです。新しい友達はどうか見つかりますか？

A そんなに辛いと思える存在に出会えたってことじゃん。いいなあ。おはようの挨拶、たわいもないやりとり、恥ずかしさも情けなさも受け止めてもらえるような感覚で相談したこと、きっと色々あったんだろうね。そんな存在に出会えたのは価値あることだなーって思うよ。

出会いがあれば別れはある。これからもたくさんの別れを経験するだろうけど、離れることが辛ければ辛いほど、それはその人との関係に豊かで満ちたものがあつた証であつて、その存在を尊びなつて、きっとその度に僕は思う。その人とのやりとりで生まれたことは僕の中に

生きているし、そういう形でいつも僕の側にいてくれるってことだと思う。そう考えたら、ありがたいな、って思うんだよね。そうすると離れることがますます辛くなるんだけどさ。まあ、だから離れることが辛いつて、それはそれだけ価値ある存在に出会えた証ってことで。

で……なに、新しい友達？んー、それって、見つけようと思わないとできないけれど見つけようと思ったからって見つかるもんじゃない。多分今の友達だつて気がついたらなんかのきっかけで友達になっていたはずでさ。自分の興味に引かれてくれる人、自分を受け止めてくれる人、自分が求めている人は、きっと自分の目の前を通り過ぎた時に、放っておけないんじゃないかって思うよ。ということで、この先がどうなるか楽しみにしています。みなさん、いってらっしゃい。



リトアニア ビルジャイにて/撮影・辻田美穂子

LIFESTYLE

別れとアート

文・写真 辻田美穂子

先日恋人との別れがモチーフになった写真展を見た。3ヶ月間別々に過ごしているうちに、彼に好きな人ができて作者は振られてしまうのだ。それも、電話で。

そのシナリオは最悪だった。パリと日本で別々に暮らした3ヶ月間が終わったら、彼女たちはインドで再会するはずだった。30年ほど前のできごとで、今みたいにネットで簡単に連絡がとりあえるわけもない。会場には、胸が張り裂ける思いでやりすごした日々の写真や、再会を待ちわびる思いがつづられた手紙が飾られていた。ところが約束の日、彼はインドに来なかった。代わりに届いたのは「事故にあった。病院にいる。連絡されし」という短い手紙のみ。慣れない土地でパニック状態に陥ったまま、か

け続けた電話が繋がったのは、何時間も経ってからだった。そして彼女は信じられない事実を聞いて頭が真っ白になる。彼はささいな怪我で病院に寄っただけで、出かけられないための言い訳をしていたのだった。なぜなら、他に好きな人ができたから。

嘘。裏切り。耐えがたい苦痛からどうにか逃れるために、作者は自分の悲しみを人に話し始めた。そして代わりに、その人たちからも一番辛い経験の話を聞いていった。恋人が自ら死を選んでしまったという話。いつも通り朝家を出た兄弟が、二度と帰らぬ人になってしまったという話。母親の何気ない行動で心に一生の傷をおってしまったという話。展示に出てくる誰もが、冷たくて重い悲しみの氷をふところに抱えたまま、それでもなんとか自分の体温でゆっくり溶かしながら生きているようだった。作者は自分が語った経験と相手から聞いた話を文章にした。悲しみは文字の羅列になった。その羅列は数十年の時

を経て、いま美術館の壁に飾られている。

つまり、作者は悲しみを「アート」にした。アートって、心にゆとりのある人や学校で勉強した人だけが「たしなむ」ものじゃない。美しいと思ったことを表現するのもアート。でも、誰にでもできる、どうにもできない気持ちの処理方法でもある。アートって、意外と余裕じゃない。結構ぎりぎりのところから生まれている。もうだめだ、倒れそうだ、と思った時に、悲しみを一度自分のふところから出してみる。写真や、歌や、絵や、文章。とにかくなんでもいい。人に見せなくてもいい。すぐには解決しないけれど、ふしぎとからだか軽くなったりすることがある。



辻田美穂子 | Mihoko Tsujita

大阪出身の写真家。祖母の生まれ故郷である「樺太」のリサーチのため、ちょっと札幌に来てみたら、すっかり居心地よくなってしまいがちと北海道6年目。やりたいことがたくさんあって、人生足りる心配。

MOVIE



妻が死んでも
悲しくない!

恋人と別れたり、友達と疎遠になったり、ペットが死んだり、そのときは果てまで悲しんでいたのに、数年経ってみると当時とは裏腹に、むしろ清々しい気持ちで「あんなこともあったなあ」なんて思い返すことがあります。

妻が死んだのに悲しんでいない自分に気がついた主人公。間違いなく妻を愛していたはずなのに、どうしてか涙が出ない。その理由を探しているうちに、自分の生き方が間違っていることに気がつきます。社会生活において長いものに巻かれ自分の利益だけを追求することに慣れてしまった結果、周りへの興味が無くなり、妻との会話も、毎日会っている警備員の顔さえも思い出せないのです。妻の死をきっかけに「これじゃあ、だめだ!」と思い立ち、今までの常識を取り壊すために、身の回り全てのものを破壊し始めます。いつも会社に向かって歩いていた通勤路を踊りながら歩いてみたり、乗っている電車を緊急停車させてみたり、自分の家をハンマーで壊してみたり。この映画の原題は『Demolition (破壊)』。邦題が最悪ですが、清々しい気持ちになる映画です。

「別れが私を成長させてくれた」なんて綺麗ごとは嫌いですが、生活している中で大きなショックを受けると人生がクルッと方向転換することがあります。以前の自分じゃとても選べなかった道を突き進むことができるようになったり、その時は悲惨な出来事でも振り返ってみると案外心の糧になっていたります。



雨の日は会えない、
晴れた日は君を想う

ジャン＝マルク・ヴァレ / TCエンタテインメント / ¥3,296

EVENT

写真展
わたしたちの北星余市展現役大学生による、
クラウドファンディングで実現!

静岡県立大学の学生4名が実行委員会を組織し、北星余市を世の中に知ってもらい存続して欲しいという願いから、クラウドファンディングで資金を集め、静岡県で写真展を企画してくれました。北星余市高校と、高校に繋がる様々な方々と協力しながら実施に向けて準備を進めています。

なぜ、静岡の学生が、北海道にある高校の写真展を開催するに至ったのでしょうか。鴻野さんは、クラウドファンディングのウェブサイト上で次のように述べています。

「これは他人事ではないと、強く感じたからです。文面では伝えきれないような、あの場を過ごさなければ分からないような、『人との真っ当な関わりとは何か』『本物の教育

とは何か』を考えさせる空間が、北星余市にはあります。北海道の片田舎にある北星余市は、私たちにとって無関係の場所でしょうか。同じ時代を生きる若者として、日本からこの場所がなくなってほしくない。なくなろうとしているいま、何か行動しなければならない。そんな私たちの想いから、私たちの問題意識を持って、『わたしたちの北星余市展』は開催されます。」

3月3日の最終日にはトークイベントも開催されます。ぜひお近くの方は足を運んでみてはいかがでしょうか。

わたしたちの北星余市展

日時：2019年2月25日(月)～3月3日(日)
会場：静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」
静岡市駿河区東静岡二丁目3番1号

EVENT

写真展 光の在り処
～未来を紡ぐ北星学園余市高校～

2019.3.6(Wed)～3.10(Sun)

昨年、42期生として在籍していた山田恵理子さんが「存続のため、応援したい」「北星余市の素晴らしさと現状を伝えたい」と冊子制作を提言。しかし恵理子さんは化学物質過敏症で移動も困難な状況にあるため、姉の淳子さんが冊子制作の実務を担いました。淳子さんの知人で写真家の戸澤裕司さんの協力のもと、生徒や彼らをあたたかく見守る周囲の人々の表情を捉えた写真や、写真部の生徒たちが撮った「お気に入り写真」を編集し、冊子「いまを、生きる」が完成しました。



本写真展は、引き続き存続応援活動をしている戸澤裕司さんが撮影した北星余市の行事や授業風景、生徒達のポートレート写真が展示されると同時に、生徒達有志30名が撮影した写真が展示されます。北星余市にいる彼ら彼女らがどのような高校生活を送っているのか、その眩しい青春の瞬間や友と過ごす大切な時間、大切な居場所、「学校が存続して欲しい」という未来への想いを込めて展示される写真をぜひご覧ください。

光の在り処～未来を紡ぐ北星学園余市高校～

日時：2019年3月6日(水)～3月10日(日)
会場：ビクトリコショップ&ギャラリー表参道 GALLERY1
東京都渋谷区神宮前4-14-5 Cabino表参道 1F

REPORT



冬季スポーツ大会!

事務の國久です！12月10日、11日に冬季スポーツ大会が行われました。転校して来た生徒も多かったのですが、このスポーツ大会が、北星余市に来て初めての行事となった生徒も多くいます。まだ慣れないクラスや環境の中で参加した初めての行事はどうだったかな？スポーツ大会を通じて、クラスの子とまた関わるきっかけができたかな。みんなにとって少しでも心に残るものが得られていたら嬉しいです。当日は保護者から寮母のみなさんまで見に来てくださり、大盛り上がり！みんなが真剣にプレイしている姿や応援している姿もそうですが、今までと違う一面も見ることができました。「この子ってこんな風に声かけするんだ!」、「1年生の時のあの子だったらあんな風にしていないだろうな、変わったなあ。」と色々な気づきがありました。当たり前ですが職員室にいるだけでは分からない事や気づかないことが、たくさんありました。そんな気づきや感動を与えてくれてありがとう。



そして、生徒会執行部のみんなも初めての大きな行事。初めてながらもみんな一生懸命に動いていましたね。慣れている先輩たちにも協力してもらいながら、なんとか無事に終わることが出来たのではないのでしょうか。終わって一安心といったところかな。本当に、本当にお疲れ様でした。3年生はこれが最後のスポーツ大会でした。みんなにとっていい時間を過ごすことが出来たかな。1、2年生は来年、更にパワーアップした姿を見られるかな？楽しみです。

REPORT

総合講座が終了しました

総合講座は2.3年生のみの授業となり、本校教員が持つ講座と外部の方に来てもらっている講座を合わせて現在17講座あります。講座を通して今まで見えなかったものや気がつかなかったこと、様々な物事を知るきっかけとなり、1人1人の可能性や才能を広げていってほしいと考えています。そして、教員ではないまた違う大人と関わることで今まで知らなかった生き方や考え、価値観に触れ、自分の道を自分で見つけていってほしいと思います。

年度始めに1つの講座を選び、1年間を通して学んでいきます。ぶどうのお仕事ではワインを作ります。ですが、それは数年前に卒業した先輩たちが育てた葡萄からつくられた貴重なワイン。時を超えて今卒業生の元へ送り届けられ、今年度受講した生徒の元にも数年後ワインが届きます。彫金では素敵なアクセサリを作ったり、ゴスペルでは堂々とした歌声を披露。社会福祉では町内の老人ホームや学童などに出向いて交流をし、養護学校の生徒を招待して太鼓の講座を体験してもらったり地域と深く関わり合いました。他にはピアノやチョークアートなどもあります。体を動かすものでいえば、HIP-HOPダンスやヨットとスノーボード。その名の通り夏はヨットで海へ繰り出し、冬は雪山でスノーボードをするので、北海道らしさをおおいに満喫できます。このように様々なジャンルがある中で、生徒たちは新しいことにチャレンジしていきます。



編集後記

冷静と情熱の間を探る佐々木さんと無理難題も包み込んでくれる石田さん、大好きで尊敬する魔法使いの辻田さん、素敵な書評をくれる会ったこともないミスターX、その他支えてくださるチーム3KGの皆さん、そんな仲間と秋から3号目を発行できて幸せです。麻美もそう思うでしょー？みんなで一度ご飯食べにいきたいな★(田中亨) 高校時代にいつも一緒にいた友人がいました。さとしくんはハードロックとバイクが好

き。僕はどちらも興味がありません。毎日何を話していたのかな？今はもう連絡先がわかりません。元気かな。結婚したかな。親友の誕生日にはお祝いを。10年、20年と関係が続いていく秘訣です。反省も込めて。(佐々木信)

表紙の写真の裏話

チョコビの位置！服は濃い、薄い、濃い色で並んで！ひとり座って！足曲げる！表情真剣で、シュッとして！などなど…不思議な注文に頑張って応えてくれました。写真って、意外と一瞬で撮れないんです。(辻田美穂子)

hoshiii
ほし
星しんぶん

発行日：2019年2月20日(水)
発行元：北星学園余市高等学校

北星学園余市高等学校

046-0003
北海道余市郡余市町黒川町19丁目2-1
Tel. 0135-23-2165 (職員室)
Fax. 0135-22-6097 (職員室)

www.hokusei-y-h.ed.jp



日々の学校生活の様子を
更新しています
ブログ
北星余市はいま!



動画で観る北星余市
北星余市
Youtubeチャンネル



卒業生がいかに
生きているか
ウェブマガジン
STAR RECORD

